

光明真言土沙勸信記の声点について

— 軽声声点は意図的に差声されたものか —

榎 木 久 薫

目次

- 一、はじめに
- 二、資料解説
- 三、本資料における軽声声点の存在
- 四、軽声出現の音声的条件
- 五、本資料における軽声出現の状況
- 六、まとめ

一、はじめに

光明真言土沙勸信記は明恵上人の撰に係る資料である。現在は巻上と別記が大東急記念文庫に蔵されている。別記末尾には、次に示すような識語が記されており、また、別記巻末の次のような記述、及び後に示す「高山寺明恵上人行状」(仮名行状)の記述によって、その著述意図も知られる。

別記識語 安貞二年極月廿六日午時

於高山寺禪堂院草菴記之了

別記巻末の記述 六四五行

コノ記三卷ノ

ナカニハ・タ、在家ノ信ヲス、

ムルアヒタ・假字^{ニテ}・土沙ノ功能

その表記は、字音語は一例を除いてすべて漢字表記され、一方和語はいわゆる訓漢字のうちでももつとも基本的なもの以外は片仮名表記されている、いわゆる漢字交り片仮名文である。ちなみに、字音語で片仮名表記されているのは、次の例である。

上巻 三〇二行 大日・釋迦・弥勒・觀音等ノ像・又兩部ノ万タラナリ・

二、資料解説

本資料の解説には、従来次の三つがある。

- 1、大東急記念文庫貴重書解説 佛書之部 川瀬一馬 昭和三十一年十一月
 - 2、大東急記念文庫蔵光明真言土沙勸信記総索引本文篇 序 三保忠夫 昭和五十年十月
 - 3、明恵上人手訂定稿本（重文） 光明真言土沙勸信記 附、同如來遺跡講式 覆製解説 川瀬一馬 昭和六十年七月
- 巻の構成について、川瀬氏は3、において次のように推定しておられる。

これ（光明真言加持土沙別記という名称）は前巻が本文完成の後、程経て「上巻」と名称を附加してある点から推して、この別記が述作されたため、これを下巻分に宛てて、上下二巻とし、関聯はあつても、もともとは別々に著作したものであるから、別記の称呼をもその儘残してあるのであらう。但し、本別記の末に「コノ記三巻ノナカニハ」などと言つてある点から推すと、それは勸信記二巻と別記一卷を意味するものかとも思はれるが、或はまた、「土沙義」を一巻とし、これに土沙勸信記一卷（上巻）、別記（下巻）を併せて三巻としてゐるのかもしれない。暫く疑いを存しておく。一方、三保氏は2、において次のように述べておられる。

光明真言土沙勸信記は、明恵上人高弁の撰に係る。巻上・巻下、別記の都合三巻より成り、前二者は安貞二年（一二

二八)十一月九日、後者は同年極月二十六日に撰述せられた。

このように、光明真言土沙勸信記は本来、上巻・下巻、別記の三巻であった、土沙義を一巻とし土沙勸信記一巻(上巻)、別記(下巻)を併せて三巻としていた、の両説がある。この問題については「高山寺明恵上人行状」(仮名行状¹⁾)の次のような記述によるならば、本来、上巻・下巻、別記の三巻であったと推定される。

一嘉祿三年丁亥五月十六日、光明真言ノ土沙義ヲ撰^ス、其後安貞二年九月ノ比ヨリ光明真言ノ法ニヨテ土沙加持アリ、カ
ノ土沙ノ間ノ功能并得益勝利ノ委細ハ、同勸信記上下二巻并別記一巻ヲ作^テコレヲ注サレタリ、(下巻三八丁オモテ)
次に、本文の書写事情については、川瀬氏が¹、に

上下巻ともに間々墨消訂正加筆があり、その分のみ明恵上人の筆であるが、本巻は一旦門弟に清書せしめさらにこれに自ら手を加へた定稿本と見るべきであらう。

と、述べておられ、また³、には更に詳しく次のように述べておられる。

本文は近侍の門弟某(恐らくは仁眞)の筆になると推測されるが、それは師明恵の筆になる稿本を忠実に手写しよう
とつとめて清書したものであることが、本書の書写相からもよく看取せられる。本文の筆者自身が書き誤りなどを、
或は料紙を削つて書き改め、或は「○」印を施して脱字を書き加へなどしてゐる。それに対して師の明恵が、出来上
つた後の清書本を丹念に校閲して訂正加筆し、これを「定稿本」としたものである。

更に、本文に対する明恵の訂正は殆ど墨消しであること、但し、上巻第十七紙の十一行分、及び第二十紙首六行分が明
恵の自筆であることを述べておられる。

次に、三保氏は²、において、川瀬氏が本資料を上人手訂稿本であるとされるのは、別記巻末の識語の次のような訂
正の仕方から推してのことであろうとされている。

安貞二年極月廿六日^{*}夜^{*}午時^{*}……「六」字ノ下ニ「四」字ガアル、重ネ書シテ「六」字トスル

於高山寺禪堂院草菴記之了

「夜」字ヲ塗消スル

眞言行人高弁

「午」字ノ下ニ「子」字ガアルラシイ、重ネ書シテ「午」字トスル

次に、本資料には朱及び墨による片仮名付訓・声点などがある。これらについては、川瀬氏は3、において、漢字には朱筆で片仮名付訓を施し、朱の声点をも加へてある。それ等は師の原本に従つたものである。と述べておられる。一方、三保氏は、2、で次のように述べておられる。

朱筆には、少なくとも太筆と細筆との二様がある。黒筆にも、少なくとも、濃墨（第一種墨訓）と薄墨（第二種墨訓）との二様がある。孰れも安貞二年、又はそれに近い頃のものであろう。濃墨は、上人が本文及び朱筆を訂正し加筆した折のものかと思われるが、定かでない。薄墨は、本文所引の漢文に對する訓点として用いられている。

この内、墨筆について3、では、

明恵が自筆で本文に附訓を墨で加筆してゐる箇所が数箇所あるが、それ等は薄墨で、且つ文字の書き様も潤達なので、その字様と共に弁別しやすいと思はれるから、一々指摘しないでよいと考へる。

と述べておられる。

川瀬氏は3、では、墨筆に二様があることには言及されていない。しかし、濃墨筆と薄墨筆とでは墨色以外にも書体の相違もある。また、本文の中で明恵自身の筆と考えられている箇所と比較してみると、書体に相違が認められるようである。

一方、朱筆による片仮名付訓は、太筆は概して朱が薄く、細筆は朱が濃い。しかし、書体に明瞭な差異は見出されない。これらの朱筆は、紙面を擦り消したり或は直接その上から、朱筆による訂正が見られる。一方、墨筆によつても同様の訂正が施されている。このことから、朱筆は墨筆よりも先に加えられたものとの推定が成り立つ。以上の本文、本文明恵自筆箇所、朱筆・墨筆付訓の仮名字体は、いずれも鎌倉初期の字体の特徴が認められる。

次に、声点について見ると、朱声点が朱付訓の太筆・細筆とどのような関係にあるのかは明瞭でない。しかし、朱付訓の太筆・細筆と、筆の太さ・朱色ともに明らかに別のものとはみなし難いようである。朱声点には、星点と圈点とがあるが、これらが同筆なのか別筆なのかは判断し難い。これら朱声点には、朱付訓のような墨筆による訂正は見られない。但し、擦り消した上で朱筆による訂正は間々見られる。一方、墨声点は、圈点として次の例、二例のみ見られる。

上巻 六三七行 幽 鍵

この墨声点が墨付訓と同筆なのかどうかとも判断し難い。しかし、これらの声点は朱筆・墨筆による片仮名付訓が加えられたのと同時に、同一人物によって加えられたとするのが妥当であろう。

以上のように、本資料は鎌倉初期、明恵を中心とした高山寺教学の下で作られたものであつて、全体として明恵を中心とした言語圏の言語特徴を反映したものとみなすことができるであろう。

三、本資料における軽声声点の存在

さて、本稿は、光明真言土沙勸信記の字音に関する考察の内、声点について取り上げたものである。本資料には、前述した通り、漢字に対して主に字音の仮名付訓が施されている。それに加えて、声点も差されている。これらの声点は、朱星点があつとも多く見られ、朱圈点が僅かにあり、墨圈点が一語二例のみ見られる。ところで、これらの声点について見ると、通常の平声、入声の位置よりも高い位置に差されたものが見られる。これらの声点が平声、入声の軽声を表わすものとして差されたものかどうかを明らかにしようとするのが本稿の目的である。

さて、本資料の声点が軽声を重と區別して差声されたものかどうかを知る手掛かりとして次のようなものがある。

上巻 七八行 勅 使 … 「勅」字ノ入声重ノ位置ノ朱圈点ヲ擦リ消シテ入声輕ノ位置ニ差声スル

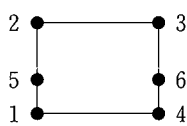
--- 「使」字ノ上声ノ位置ノ朱圈点ヲ擦リ消シテ平声ノ位置ニ差声スル

右に示したように勅の字の入声重の位置に差された朱圈点を擦り消して、より高い位置に差し替えたという例がある。ちなみに、使は上声の位置に差声された朱圈点を擦り消して、平声の位置に朱圈点を加えている。この例は、朱圈点のものであって、本資料においてもっとも多く見られる朱星点にはこのような例は見られない。しかしこの例は、本資料の声点、軽声を重と区別して差声されたものである可能性を示すものといえる。

そこで、本資料の声点の平声、入声の位置に差声されたものについて、重の位置よりも高い位置に差声されたものを、重とは別の声点として区別することとした。重との区別は微妙なものもあるが、明らかに重と認定されないものは別の声点として区別した。それらを差声位置ごとに整理したものが、表1である。用例では声点は数字によって示した。差声位置と数字との対応、および用例翻字の凡例は次の通りである。

用例翻字の凡例

- 1、Aは上巻、Bは別記。下の数字は行数を示す。
- 2、数字は声点を示す。



かつこなしは朱筆、「」は薄墨筆。：は、声点が濁点であることを示す。

3、片仮名は仮名付訓

() は朱筆、() は濃墨筆、「」は薄墨筆を示す。

表 1

用例 番号	現場 形	鑑行	漢字	字音 付訓	声点 清濁	単語
平						
1	愛	A237	愛	(アイ)	1	歡(クワン) 3喜(キ) 1:愛(アイ) 1敬(キヤウ) 1
2	影	A163	影	(ヤウ)	1	十方諸佛影(ヤウ) 1現(ケン) 1:中
3	温	A267	温	(ウン)	1	温(ウン) 1室(シツ) 4:
4	化	A230	化	(クエ)	1	變(ハン) 1化(クエ) 1:身(シン)
5	果	A398	果	(クワ)	1	增(ソウ) 3:上(シヤウ) 1:果(クワ) 1
6	餓	A057	餓	(カ)	1	餓(カ) 1:鬼(クキ)
7	解	A155	解	(ケ)	1	深(シム) 3:信(シン) 1解(ケ) 1:力(リキ) 4
8	悔	A644	悔	(クワイ)	1	後(コウ) 3悔(クワイ) 1
9	戒	A263	戒	(カイ)	1	破(ハ) 1戒(カイ) 1
10	尋	A404	尋	(ケ)	1	障(シヤウ) 1尋(ケ) 1:
11	間	A037	間	(ケン)	1	無(ム) 2間(ケン) 1地(チ) 獄(コク) 等(トウ)
12	眼	A240	眼	(ケン)	1	得(トク) 眼(ケン) 1:林(リン)
13	翫	B645	翫	(クワン)	1	賞(シヤウ) 5翫(クワン) 1:

14	願	A058	(クワン)	1 :	一切如來眞(シン) 3 實(シツ) 6 : 本(ホン) 5 願(クワン) 1 : 大灌 (クワン) 3 頂(チャウ) 2 : 光眞言加持土沙
15	喜	A237	(キ)	1 :	歡(クワン) 3 喜(キ) 1 : 愛(アイ) 1 敬(キヤウ) 1
16	期	A642	(コ)	1 :	脱(タツ) 6 期(コ) 1 :
17	起	A065	(キ)	1 :	緣(エン) 3 起(キ) 1 : 難(ナン) 3 思(シ) 2 :
18	儀	A376	(キ)	1 :	儀(キ) 1 : 軌(クヰ) 2 本經
19	義	A033	(キ)	1 :	字(シ) 義(キ) 1 :
20	義	A034	(キ)	1 :	句(ク) 1 義 1 :
21	救	A635	(ク)	1	救(ク) 1 護(コ) 1 :
22	鏡	A010	(キヤウ)	1	大圓(エン) 3 鏡(キヤウ) 1 智
23	仰	A083	(カウ)	1 :	信(シン) 仰(カウ) 1 :
24	句	A034	(ク)	1	句(ク) 1 義 1 :
25	苦	A039	(ク)	1	罪(サイ) 1 : 苦(ク) 1
26	苦	A048	(ク)	1	苦(ク) 1 報(ホウ) 1
27	敬	A142	(キヤウ)	1	礼(ライ) 1 敬(キヤウ) 1 諸佛等
28	敬	A237	(キヤウ)	1	歡(クワン) 3 喜(キ) 1 : 愛(アイ) 1 敬(キヤウ) 1
29	敬	A262	(キヤウ)	1	信敬(キヤウ) 1
30	見	A120	(ケン)	1	見(ケン) 1 聞(モン) 3
31	鍵	A637	(ケン)	1	幽「イウ」[5] 鍵(ケン) [1]
32	現	A163	(ケン)	1 :	十方諸佛影(ヤウ) 1 現(ケン) 1 : 中

33	後	A405	(コ)	1	後(コ) 1: 生
34	語	A013	(コ)	1	密(ミツ)語(コ) 1:
35	護	A220	(コ)	1	護(コ) 1: 持(チ) 2:
36	護	A635	(コ)	1	救(ク) 1 護(コ) 1:
37	厚	A646	(コウ)	1	厚(コウ) 1 恩(オン) 5
38	向	A160	(カウ)	1	歸(クキ) 2 向(カウ) 1
39	孝	A648	(ケウ)	1	孝(ケウ) 1 順(シユン) 1:
40	行	A070	(キヤウ)	1	奉(フ) 5: 行(キヤウ) 1:
41	行	A647	(キヤウ)	1	順(シユン) 5: 行 1
42	行	A657	(キヤウ)	1	三時練(レン) 3 行(キヤウ) 1:
43	坐	A241	(サ)	1	坐(サ) 1: 禪(セン) 處(シヨ)
44	際	A371	(サイ)	1	邊(ヘン) 3 際(サイ) 1:
45	罪	A039	(サイ)	1	罪(サイ) 1: 苦(ク) 1
46	罪	A060	(サイ)	1	罪(サイ) 1: 報(ホウ) 1
47	作	A011	(サ)	1	成(シヤウ) 3 所(シヨ) 1 作(サ) 1 智
48	作	A030	(サ)	1	作(サ) 1 法(ホウ) 1
49	作	A064	(サ)	1	他(タ) 2 作(サ) 1 自(シ) 1 受(シユ) 1:
50	使	A078	(シ)	1	勅(チヨク) 6 使(シ) 1
51	子	A653	(シ)	1	佛(フツ)子(シ) 1
52	字	A033	(シ)	1	文(モン)字(シ) 1:

53	自	A102	(シ)	1	自(シ) 1:業(コウ)自(シ) 1:得(トク) 4
54	自	A103	(シ)	1:	自(シ) 1:業(コウ)自(シ) 1:得(トク) 4
55	自	A064	(シ)	1	他(タ) 2作(サ) 1自(シ) 1受(シユ) 1:
56	者	A085	(シヤ)	1	大智(チ) 1者(シヤ) 1
57	受	A064	(シユ)	1:	他(タ) 2作(サ) 1自(シ) 1受(シユ) 1:
58	終	B271	(シウ)	1	終(シウ) 1一焉(エン) 5
59	順	A648	(シユン)	1:	孝(ケウ) 1順(シユン) 1:
60	所	A011	(シヨ)	1	成(シヤウ) 3所(シヨ) 1作(サ) 1智
61	所	A026	(シヨ)	1	所(シヨ) 1證(シヨウ) 1
62	所	A173	(シヨ)	1	所(シヨ) 1詮(セン) 3
63	勝	A232	(シヨウ)	1	勝(シヨウ) 1軍(クン) 3:王
64	勝	A238	(シヨウ)	1	勝(シヨウ) 1利(リ) 1
65	障	A404	(シヤウ)	1	障(シヤウ) 1号(ケ) 1:
66	上	A398	(シヤウ)	1:	増(ソウ) 3:上(シヤウ) 1:果(クワ) 1
67	信	A155	(シン)	1	深(シム) 3:信(シン) 1解(ケ) 1:力(リキ) 4
68	勢	B273	(シヤウ)	1	富一貴豪(カウ) 3:一勢 1
69	性	A009	(シヤウ)	1	赫(タイ) 1性(シヤウ) 1
70	性	A010	(シヤウ)	1	法(ホツ) 4界(カイ) 5赫性 1智
71	性	A011	(シヤウ)	1	平(ヒヤウ) 3:等(トウ) 1:性 1智
72	性	A408	(シヨウ)	1	稱(シヨウ) 3性 1

光明真言土沙勸信記の声点について

73	請	A087	(シヤウ)	1	召(テウ) 3請(シヤウ) 1
74	先	A183	(セン)	1	先(セン) 1年(ネン) 5
75	占	A074	(セム)	1	占(セム) 1師(シ)
76	前	A181	(セン)	1	眼(カン) 2:前(セン) 1:
77	善	A037	(セン)	1	善(セン) 1根(コン) 3:
78	奏	A089	(ソウ)	1	奏(ソウ) 1状(シヤウ) 2:
79	相	A173	(サウ)	1	實(シチ) 6:相(サウ) 1
80	相	A196	(サウ)	1	至(シ) 2相(サウ) 1大師
81	躰	A009	(タイ)	1	躰(タイ) 1性(シヤウ) 1
82	躰	A636		1	同3:躰1
83	大	A109		1	大1:事(シ) 5:
84	大	A159	(タイ)	1	大(タイ) 1:乘(シヨウ) 3:
85	地	A023	(チ)	1	大地(チ) 1:
86	地	A378	(チ)	1	悉(シチ) 4地(チ) 1:
87	智	A085	(チ)	1	大智(チ) 1者(シヤ) 1
88	湖	A387	(テウ)	1	海(カイ) 潮(テウ) 1
89	展	A216	(チン)	1	展(チン) 1轉(チン) 1:同(トウ) 3:説(セツ) 4
90	途	B545	(ト)	1	冥(メイ) 1途(ト) 1:
91	途	B627	(ト)	1	冥(メイ) 1途(ト) 1:
92	土	A061	(ト)	1	極樂園(コク) 土(ト) 1:

93	唐	A077	(タウ)	1	大(タイ) 3唐(タウ) 1
94	等	A010	(トウ)	1:	平(ヒヤウ) 3:等(トウ) 1:性 1智
95	蕩	B253	(タウ)	1	蕩(タウ) 1
96	道	A042	(タウ)	1:	遊(ユ) 2心安(アン) 3樂(ラク) 6道(タウ) 1:
97	道	A167		1:	道 1:理(リ) 1
98	鈍	A194	(トン)	1:	癡(チ) 2鈍(トン) 1:
99	念	A367	(ネム)	1	念(ネム) 1惠(ヱ) 1
100	破	A283	(ハ)	1	破(ハ) 1戒(カイ) 1
101	判	A130	(ハン)	1	判(ハン) 1
102	反	A158	(ヘン)	1:	神(シン) 3:反(ヘン) 1:
103	病	A072	(ヒヤウ)	1:	重(チウ) 5:病(ヒヤウ) 1:
104	遍	A153	(ヘン)	1	遍(ヘン) 1
105	便	A049	(ヘン)	1:	方(ハウ) 3便(ヘン) 1:
106	報	M048	(ホウ)	1	苦(ク) 1報(ホウ) 1
107	報	A060	(ホウ)	1	罪(サイ) 1:報(ホウ) 1
108	法	A030	(ホウ)	1	作(サ) 1法(ホウ) 1
109	吠	A122	(ハイ)	1:	吠(ハイ) 1:瓊(ル) 璃(リ)
110	妙	M011	(メウ)	1	妙(メウ) 1觀(クワン) 3察(サツ) 4:智
111	妙	A149	(メウ)	1	妙(メウ) 1音(ヨム) 3聲(シヤウ) 2:
112	冥	B545	(メイ)	1	冥(メイ) 1:途(ト) 1:

光明真言土沙劬信記の声点について

113	眞	B627	冥	(メイ)	1	冥(メイ) 1 途(ト) 1 :
F14	面	A123	面	(メン)	1	方(ハウ) 3 面(メン) 1
F15	利	A238	利	(リ)	1	勝(シヨウ) 1 利(リ) 1
116	理	A187	理	(リ)	1	道 1 : 理(リ) 1
117	梁	A086	梁	(リヤウ)	1	棟(トウ) 3 梁(リヤウ) 1
118	例	A408	例	(レイ)	1	例(レイ) 1 同
119	礼	A142	礼	(ライ)	1	礼(ライ) 1 敬(キヤウ) 1 諸佛等
120	漏	A367	漏	(ロ)	1	無(ム) 2 漏(ロ) 1
121	假	A251	假	(ケ)	1	假(ケ) 1 實(シチ) 6 :
122	辨	A150	辨	(ハン)	1 :	辨(ハン) 1 : 才(サイ) 3 : 海(カイ)
123	咒	A066	咒	(シユ)	1	咒(シユ) 1 沙
124	寶	A008	寶	(ホウ)	1	寶(ホウ) 1 生 3
125	竊	B253	竊	(クキ)	1 :	竊(クキ) 1 : 一
126	惠	A367	惠	(エ)	1	念(ネム) 1 惠(エ) 1
127	懷	A063	懷	(クワイ)	1	述(シユツ) 6 懷(クワイ) 1
128	變	A230	變	(ハン)	1	變(ハン) 1 化(クエ) 1 : 身(シン)
129	斷	A147	斷	(タン)	1 :	間(ケン) 3 斷(タン) 1 :
130	曉	A085	曉	(ケウ)	1 :	元(クワン) 3 : 曉(ケウ) 1 :
131	滿	A012	滿	(マン)	1	五智圖(エン) 3 滿(マン) 1
132	盡	A149	盡	(シン)	1 :	無(ム) 盡(シン) 1 :

133	畫	A150	畫	1	□無盡1:
134	眷	A144	眷	1	諸佛 眷(クエン) 1 屬(ソク) 4:
135	眉	A052	眉	1	不(フ) 2 空(クウ) 2 羈(クエン) 1 索(シヤク) 4: 經
136	聽	A083	聽	1	御(コ) 聽(チャウ) 1 聞(モン) 3
137	證	A026	證	1	所(シヨ) 1 證(シヨウ) 1
138	讀	A082	讀	1	講(カウ) 2 讀(サン) 1
139	讀	A147	讀	1	稱(シヨウ) 3 讀(サン) 1 如來
140	轉	A216	轉	1:	展(チン) 1 轉(テン) 1: 同(トウ) 3: 說(セツ) 4
141	轉	A231	轉	1	四相流(ル) 2 轉(テン) 1
142	遠	A144	遠	1	圍(キ) 2 遠(ネウ) 1
143	醉	A200	醉	1	醉(スイ) 1 心(シム) 3
144	醉	A203	醉	1	醉(スイ) 1 心(シム) 3
145	黔	A080	黔	1	黔(キム) 1 海(カイ)
平聲					
146	恩	A046	恩	5	厚(コウ) 1 恩(オン) 5
147	界	A010	界	5	法(ホツ) 4 界(カイ) 5 鉢性1 智
148	丘	A041	丘	5	青(シヤウ) 2 丘(キウ) 5 大師(シ)
149	丘	A238	丘	5	青一丘 5

150	丘	A134	丘	(シ)	5	青2丘5大師
151	事	A109	事	(シ)	5	大1:事(シ)5:
152	事	A171	事	(シ)	5	事(シ)5:
153	者	A934	者	(シヤ)	5	亡(マウ)3者(シヤ)5:
154	重	A972	重	(チウ)	5	重(チウ)5:病(ヒヤウ)1:
155	順	A647	順	(シユン)	5	順(シユン)5:行1
156	賞	B645	賞	(シヤウ)	5	賞(シヤウ)5 翫(クワン)1:
157	親	A659	親	(シン)	5	親(シン)5 疏(ソ)2
158	等	A157	等	(トウ)	5	十地(チ)等(トウ)5 覺(カク)6:
159	年	A183	年	(ネン)	5	先(セン)1年(ネン)5
160	秘	A003	秘	(ヒ)	5	大秘(ヒ)5 密(ミツ)4 法
161	奉	A070	奉	(フ)	5	奉(フ)5:行(キヤウ)1:
162	本	A025	本	(ホン)	5	本(ホン)5 不(フ)2 生(シヤウ)2
163	本	A058	本	(ホン)	5	一切如來眞(シン)3 實(シツ)6:本(ホン)5 願(クワン)1:大灌
164	幽	A637	幽	【イウ】	5	(クワン)3 頂(チャウ)2:光眞言加持土沙
165	焉	B371	焉	(エン)	5	幽【イウ】【5】 鍵(ケン)【1】 終(シウ)1—焉(エン)5

186	178	178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	人輕				
屬	力	密	墨	法	物	物	特	得	脱	舌	說	出	悉	室	察	索	渴		
A178	A052	A011	A267	A378	A113	A216	A643	A113	A113	A113	A113	A113	A113	A113	A113	A113	A113		
屬	力	密	墨	法	物	物	特	得	脱	舌	說	出	悉	室	察	索	渴		
(カツ)	(シヤク)	(サツ)	(シツ)	(シチ)	(シユツ)	(セツ)	(セツ)	(タツ)	(トク)	(トク)	(トク)	(モツ)	(フツ)	(ホツ)	(モク)	(ミツ)	(リキ)	(ソク)	
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
飢(ケ) 2 渴(カツ) 4	不(フ) 2 空(クウ) 2 竊(クエン) 1 索(シヤク) 4 經	妙(メウ) 1 觀(クワン) 3 察(サツ) 4 智	温(ウン) 1 室(シツ) 4	悉(シチ) 4 地(チ) 1	出(シユツ) 4 離(リ) 2 得脱(タツ) 4	展(チン) 1 轉(チン) 1 同(トウ) 3 說(セツ) 4	長(チャウ) 3 舌(セツ) 4	出(シユツ) 4 離(リ) 2 得脱(タツ) 4	自(シ) 1 業(コウ) 自(シ) 1 得(トク) 4	奇(キ) 2 特(トク) 4	相(サウ) 3 應(ヨウ) 2 物(モツ) 4	美(ヒ) 2 物(フツ) 4	法(ホツ) 4 界(カイ) 5 鉢性 1 智	紙(シ) 2 墨(モク) 4	大秘(ヒ) 5 密(ミツ) 4 法	深(シム) 3 信(シン) 1 解(ケ) 1 力(リキ) 4	諸佛 眷(クエン) 1 屬(ソク) 4		

184	逆	4053	逆	(キヤク)	6 :	十惡(アク) 五逆(キヤク) 6 : 等
185	合	8239	合	合6	6	
186	述	4063	述	(シユツ)	6	述(シユツ) 6 懷(クワイ) 1
187	賊	4232	賊	(ソク)	6	群(クン) 3 : 賊(ソク) 6
188	脱	4642	脱	(タツ)	6	脱(タツ) 6 期(コ) 1 :
189	勅	4078	勅	(チヨク)	6	勅(チヨク) 6 使(シ) 1
190	力	4155	力	(リキ)	6	行(キヤウ) 願(クワン) 力(リキ) 6
191	剎	4143	剎	(セツ)	6	毛(モウ) 3 端(タン) 2 剎(セツ) 6 海(カイ) 2
192	實	4058	實	(シツ)	6 :	一切如來眞(シン) 3 實(シツ) 6 : 本(ホン) 5 願(クワン) 1 : 大灌(クワン) 3 頂(チャウ) 2 : 光眞言加持土沙
193	實	4173	實	(シチ)	6 :	實(シチ) 6 : 相(サウ) 1
194	實	4251	實	(シチ)	6 :	假(ケ) 1 實(シチ) 6 :
195	樂	4042	樂	(ラク)	6	遊(ユ) 2 心安(アン) 3 樂(ラク) 6 道(タウ) 1 :
196	續	4146	續	(ソク)	6 :	相(サウ) 3 續(ソク) 6 :
197	藥	4073	藥	(ヤク)	6	方(ホウ) 3 藥(ヤク) 6
198	覺	4157	覺	(カク)	6 :	十地(チ) 等(トウ) 5 覺(カク) 6 :
199	譯	4654	譯	(ヤク)	6	翻(ホン) 3 譯(ヤク) 6

四、轻声出現の音声的条件

さて、呉音、漢音における平声、入声の轻声については、沼本克明氏にご考察がある。⁽²⁾ そのご考察の内、本稿に関連のある部分について整理すると、次のようになる。

・漢音六声体系における平声軽・入声軽の、切韻系

韻書（広韻・韻鏡）の声調との対応関係

	全清	次清	次濁	全濁
平	軽		重	
上				
去				
入	軽		重	

当該字 + 上声

上声 + 当該字

去声 + 当該字

まず漢音については、漢音の六声体系においては、切韻系韻書における平声全清、次清が平声軽と、平声次濁、全濁が平声重と対応し、また切韻系韻書における入声全清、次清、次濁が入声軽と、入声全濁が入声重と対応するとされている。次に、呉音（法華經音読）の入声軽については、入声軽は単字声調としては存在せず、連読上の声調変化の結果として出現するものであり、その条件は、入声重が上声字、または去声字に下接する場合、もしくは、上声字に上接する場合であるとされている。一方、呉音平声軽については、法華經音読としては「一切」しか見出せず、なぜこの語に限ってこういう型で読まなければならなかったのかの説明は今の所不可能である。或は強調意識が声調に反映せしめられたものであろうかとされている。

五、本資料における軽声出現の状況

さてそこで、まず、本資料において、平声、平声軽、入声、入声軽の位置に差声された漢字すべてについて、切韻系韻書（広韻、韻鏡）の声調体系と比較してみた。表2がそれである。

広韻 本資料	平				上				去				入			
	清	次清	濁	清濁	清	次清	濁	清濁	清	次清	濁	清濁	清	次清	濁	清濁
1平	6		9	5	19	7	15	7	40	3	21	13	1			
5平 軽	4	4	1	1	4		1		2		3					
6入 軽													1	3	7	6
4入													6	5	2	5

<表2>

広韻 本資料	平			
	清	次清	濁	清濁
1平			4	2
5平 軽	2	4		1

<表3>

このうち、切韻系韻書において、平声であつて本資料においても平声、および平声軽の位置に差声されている漢字についてみると、沼本氏が漢音の六声体系の平声重、平声軽と、切韻系韻書における声調との対応関係について整理されたものと合っているように見える。しかし、これらの内には、呉音であつて平声が差声されているものも含まれている可能性があるがあるので、当該字に付訓された仮名音形、及び前後の字の仮名音形と声点によつて漢音読語と推定できるもののみについて見ると、表3の通り、用例数は少なくなるが、沼本氏が整理されたものと同様のパターンをなしていると思われる。なお、平声・平声軽の位置に差声された漢字で、切韻系韻書でも平声であるもののうち、漢音読語と推定され

るものは、次の通りである。

平声	31 A637	鍵 (平濁)	幽 [イウ]	[5]	鍵 (ケン)	[1]
	58 B271	終 (平清)	終 (シウ)	1—焉 (エン)		5
	74 A183	先 (平清)	先 (セン)	1年 (ネン)		5
	76 A181	前 (平濁)	眼 (カン)	2:前 (セン)		1:
	90 B545	途 (平濁)	冥 (メイ)	1—途 (ト)		1:
	91 B627	途 (平濁)	冥 (メイ)	1—途 (ト)		1:
	112 B545	冥 (平清濁)	冥 (メイ)	1—途 (ト)		1:
	113 B627	冥 (平清濁)	冥 (メイ)	1—途 (ト)		1:
平声輕	146 A646	恩 (平清)	厚 (コウ)	1恩 (オン)		5
	148 A041	丘 (平次清)	青 (シヤウ)	2丘 (キウ)		5大師 (シ)
	149 B238	丘 (平次清)	青丘 ⁵			
	150 A134	丘 (平次清)	青 ² 丘 ⁵ 大師			
	157 A659	親 (平次清)	親 (シン)	5疏 (ソ)		2
	159 A183	年 (平清濁)	先 (セン)	1年 (ネン)		5
	164 A637	幽 (平清)	幽 [イウ]	[5]	鍵 (ケン)	[1]
	165 B271	焉 (平清)	終 (シウ)	1—焉 (エン)		5

次に、切韻系韻書において入声であつて、本資料においても入声、および入声輕の位置に差声されている漢字について表2をみると、沼本氏の整理されたものとまったく合わないことが分かる。そこで、平声の場合と同様に、漢音読語、

及び呉音読語と推定できるもののみについて見ると、漢音読語と推定できるものは、次に示した二例しかないことが分かる。

入声 178 B344 物(入清濁) 美(ヒ) 2:物(フツ) 4:

入声軽 186 A063 述(入濁) 述(シユツ) 6 懷(クワイ) 1

表2でこの位置に分類される字の殆どは呉音読語と推定されるものである。なお、入声・入声軽の位置に差声された漢字で切韻系韻書でも入声であるもののうち、呉音読語と推定されるものは、次の通りである。

入声 166 A178 渴 飢(ケ) 2 渴(カツ) 4

167 A052 索 不(フ) 2 空(クウ) 2 竊(クエン) 1 索(シヤク) 4: 經

170 A378 悉 悉(シチ) 4 地(チ) 1:

171 A113 出 出(シユツ) 4 離(リ) 2 得脱(タツ) 4:

172 A216 説 展(チン) 1 轉(テン) 1: 同(トウ) 3: 説(セツ) 4

175 A103 得 自(シ) 1: 業(コウ) 自(シ) 1: 得(トク) 4

176 A171 特 奇(キ) 2 特(トク) 4:

177 A377 物 相(サウ) 3 應(ラウ) 2 物(モツ) 4

179 A010 法 法(ホツ) 4 界(カイ) 5 躰性1 智

181 A003 密 大秘(ヒ) 5 密(ミツ) 4 法

182 A155 力 深(シム) 3: 信(シン) 1 解(ケ) 1: 力(リキ) 4

183 A144 屬 諸佛 眷(クエン) 1 屬(ソク) 4:

入声軽 184 A053 逆 十惡(アク) 五逆(キヤク) 6: 等

- 186 A232 賊 群(クン) 3:賊(ソク) 6
 190 A155 力行(キヤウ) 願(クワン) 力(リキ) 6
 191 A143 刹 毛(モウ) 3 端(タン) 2 刹(セツ) 6 海(カイ) 2
 192 A058 實 一切如來真(シン) 3 實(シツ) 6:本(ホン) 5 願(クワン) 1:大灌(クワン) 3 頂
 (チャウ) 2:光眞言加持土沙
 193 A173 實 實(シチ) 6:相(サウ) 1
 194 A251 實 假(ケ) 1 實(シチ) 6:
 195 A042 樂 遊(ユ) 2 心安(アン) 3 樂(ラク) 6 道(タウ) 1:
 196 A146 續 相(サウ) 3 續(ソク) 6:
 197 A073 藥 方(ホウ) 3 藥(ヤク) 6
 198 A157 覺 十地(チ) 等(トウ) 5 覺(カク) 6:
 199 A654 譯 翻(ホン) 3 譯(ヤク) 6

そこでこれらの漢字について、その上接字、下接字の声調を見ると、表4のようになる。

〈表4〉

入声

	上接字	下接字	計
平	4	1	5
平輕		1	1
上	3	1	4
去	1		1
入輕	1		1
計	9	3	12

入声輕

	上接字	下接字	計
平	3	1	4
上	1		1
去	7		7
入			
計	11	1	12

まず、本資料において入声軽の位置に差声されている字について、その上接字・下接字を見ると、平声字が上接、下接した例があり、上声字は上接した例が一例しか見られないが、去声字が上接した例がもつとも多く見られる。これは、沼本氏が呉音入声字において軽声が出現する条件について整理されたものと合うものである。一方、入声の位置に差声されている字について見ると、上声字が上接、下接した字がみられるが、平声字が上接、下接した例がもつとも多く、逆に去声字は上接した例が一例しか見られない。これは、入声軽字の上接、下接字の声調とは明らかにパターンが異なっている。

最後に、呉音平声軽であるが、この声調については先に述べたように、沼本氏も、法華経音読としては、「一切」以外用例を見ず、どのような音的条件的の下で平声重が軽に移調するのか詳かでないと言われている。本資料には、「一切」の例は見られないが、それ以外に呉音読語であつて平声軽の位置に声点が差されているものがある。そこでこれらの語について入声軽の場合と同様に、その上接字・下接字についてその声調を整理してみたものが表5である。

〈表5〉

平声

	上接字	下接字	計
平	24	25	49
平軽	4	1	5
上	7	2	9
去	20	14	34
入	1	4	5
入軽	2	1	3
計	58	47	105

平声軽

	上接字	下接字	計
平	1	4	5
上		1	1
去	1		1
入	1	1	2
入軽	1	1	2
計	4	7	11

この整理によつては、平声で多く見られる上接字・下接字が去声であるものが、平声軽では僅かであることが分かる。平声軽に去声字が上接・下接すると曲調アクセントが連続することになり、特に去声字が下接すると中低型アクセントになるので避けられたと考えることが出来る。しかし、本資料では用例が十分でなく、呉音平声軽出現の積極的な要因

は見出すことが出来なかつた。なお、平声・平声輕の位置に差声された漢字で、呉音読語と推定されるものは、次の通りである。用例が多数であるので、煩を避けるため用例番号のみを示す。

平声 1 4 5 7 9 10 14 15 17 20 21 22 24 25 26 27 28 30 35 36 38 39 40 41 42 44 45 46 47 49 50 54 55 56 57 59 60 61
62 63 64 65 66 67 68 69 71 72 73 77 78 81 82 83 84 86 87 89 94 96 97 98 99 100 102 103 105 106 107 110 111 114 115
116 119 120 121 122 124 126 128 129 130 131 134 135 136 137 139 140 141 142 143 144

平声輕 147 151 153 154 155 158 160 161 162 163

六、まとめ

以上、従来の研究によって明らかにされた平声輕、入声輕が出現する音声的条件と対比させてみると、本資料において、平声、入声の重の声点の差声位置より高い位置に差された声点の中には、輕声を示すものとして意図的に差声されたものがあることが分かつた。しかし一方で、重の声点の差声位置より高い位置に差声された声点の中には、従来明らかにされている輕声出現の条件にはずれるものも比較的多く見出される。これらの例については、まず、輕声の位置認定の問題があるであろう。しかし、重の差声位置とほんの僅かしか違わない位置に差声された例が見られることは、輕声を重と区別する意識が緩んだことによつて、差声位置も重と輕とを明確に区別しなくなつたためとも考えられる。また一方では、漢字音の国語化の進展に伴つて、従来整理された輕声出現の条件以外にも輕声が出現する条件が生じていたことも考えられる。しかし、この点については、本稿での検討では新たな条件を見出すことはできなかった。

本稿は、光明真言士沙勸信記の声点、ひいては字音の研究の一部分をなすものである。本稿では本資料に見られる用例の整理のみに終つたが、本資料に示された字音の性格を考えるためには、同時期に高山寺で加點された訓点資料や字音読資料との比較検討が必要になつてこよう。それによつて本資料の字音の性格が明らかになり、また、明恵および

その周辺の人々にとって片仮名文に字音の加点をすることがどのような位置付けをされていたかを知る手掛りとなるであろう。また更に、本資料の字音の性格を明らかにすることによって、鎌倉時代初期、高山寺言語圏において作成された各種の片仮名文の中における本資料の位置付けを明らかにする一助ともなるであろう。

なお、本資料の研究については、三保忠夫氏が油印刊行された翻字本文に多大な恩恵を蒙った。また、原資料の調査については、金子彰氏が二度に亘って調査されたものに基づいて、昭和五九年の春と夏の二度に亘って調査を行なった。その際には大東急記念文庫の文庫員の方々に多くの便宜を計って頂いた。ここに記して謝意を表わす次第である。

注

(1) 「高山寺明恵上人行状」(仮名行状) 明恵上人資料第一(高山寺資料叢書第一冊) 東京大学出版会 一九七一年三月

(2) 「平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究」第一部 第四章 第二節 第二項 呉音に於る軽声に就て 第二部 第四章 漢音に於る声調の諸問題 武蔵野書院 昭和五七年三月

〔付記〕 本稿は、昭和六十年年度鎌倉時代語研究会夏期研究集会において口頭で発表したものに、補筆して成稿としたものである。研究集会においては、小林芳規先生・沼本克明氏より有益な御示唆を頂いた。ここに記して学恩に謝意を表わす次第である。